

書評：『基督教思想』編『原子力とわたしたちの未来——韓国キリスト教の視点から——』
(神山美奈子他訳)、かんよう出版、2012年。

洪 伊杓

今回書評で取り上げる、『基督教思想』編『原子力とわたしたちの未来——韓国キリスト教の視点から——』は、原子力あるいは原発をめぐる現在の韓国キリスト教界の議論の一端を紹介した論集であるが、まず、本書の成立事情の説明を行い、次に若干のコメントを交えつつ、本書の内容を概観したい。そして、最後に書評者の立場からの本書の意義が論じられる。

1. はじめに： 翻訳出版の経緯と編集過程

韓国の代表的なキリスト教界雑誌である『基督教思想』(大韓基督教書会)は、福島原発事故1年を迎える2012年3月号において「原子力と私たちの未来」という特集を組んだ。この特集の内容を知った日本の「かんよう出版」がその内容を日本語訳し出刊するよう提案して来た。最初は『基督教思想』2012年3月号特集として掲載された7編のみで構成された小冊子として企画されたが、「韓国基督教教会協議会(KNCC)生命倫理委員会」と「脱核エネルギー教授の集まり」が共同主催した「脱核と倫理セミナー」(2012年2月)において発表された張会翼(ソウル大学物理学科名誉教授)の原稿などと、ソウルの「韓国基督教教会館」で「核なき世のための韓国キリスト者連帯」が開催した「核なき世のための神学と倫理」というシンポジウム(2012年4月)の8編の論稿も共に訳し、結局20編を含む論集として出版されることとなった。

『基督教思想』の編集部を通して新しく再編集された本書の内容は以下の通りである。

序文 この本が出版されるまで(洪承杓)

巻頭言 核兵器と核エネルギー、そして生の倫理(朴宗和)

1 原子力とわたしたちの未来 韓国での問題意識

- ・核エネルギー問題をどう考えるか(張会翼)
- ・未来を奪われた子どもたちのために葬送曲が聞こえるか(金俊宇)
- ・核発電、私たちが忘れて過ごしていた不便な真実(李憲錫)
- ・原子力に代案はあるか(李必烈)

2 現場の声から

- ・わずか一七〇秒で日本の原発の安全神話は完全に崩れ去った(李民洙)
- ・原子力が社会に及ぼす影響と確執解消のための課題(李侑珍)
- ・被曝者と十字架(金貞秀)
- ・原子力発電所と送電塔(李正培)

3 原発問題 その神学的応答

- ・核とキリスト教信仰は両立しえない（張允載）
- ・核エネルギーに対する神学的応答 福島原発の崩壊状況を見守りながら（李正培）
- ・命を選ぶことをめざす女性神学的言説（金愛英）
- ・核と聖書（李恒珍）
- ・核科学の未来のための神学的提言（申益常）

4 脱核のためのキリスト教の道

- ・うめきの声を聞く瞬間、脱核の夢はかなう 我が国の原子力発電の問題と私たちの課題（柳美浩）
- ・核兵器・核エネルギーのない世界へ向かう 教会とキリスト者の信仰実践（鄭址錫）
- ・原子力発電とキリスト教信仰 原発爆発以後、教会の代案を求めて（梁在成）

5 世界教会の責任と課題

- ・核問題とエキュメニカル運動 WCCを中心に（金容福）
- ・CWME 文書の意義と脱核信仰の神学的条件（金熙獻）
- ・北朝鮮のミサイル発射と核首脳会談の虚構と真実（盧晶宣）
- ・東アジアの非核化のための宗教間生命連帯
東北アジアの地政学構図の展開と正義、平和、生命運動に対する神学的省察
東北アジア連帯網のために（金容福）

[付録]韓国キリスト教界の原発に関する宣言文

- ・二〇一一年 命を選ぶことをめざす韓国女性神学者の脱核要求声明書（韓国女性神学者協議会および女性神学フォーラム）
- ・脱原発運動に積極的な支持と連帯を表明します！（韓国基督教教会協議会）
- ・核のない世界のための韓国キリスト者信仰宣言（韓国基督教教会協議会生命倫理委員会ほか）
- ・東アジア脱原発・自然エネルギー三一人宣言（韓国・中国・日本・他の三一人による東アジア脱原発・自然エネルギーネットワーク）
- ・核なき世のため韓国キリスト者連帯 創立宣言文（「核なき世のための韓国キリスト者連帯」創立記念シンポジウム）

2. 各部内容の紹介

第1部 原発と私たちの未来：韓国での問題意識

この第1部に収録された4編の論考においては、原子力に対する一般的あるいは概論的な理解が考察されている。以下、内容を紹介したい。

まず韓国の代表的なクリスチャン物理学者である張会翼(ソウル大学校名誉教授)は、「核エネルギー問題をどう考えるか」という論稿において原子力の問題をキリスト教の「原罪」概念と理解し、善悪を知る木を原子力と同一視しながら説明した。韓国基督教研

研究所長である金俊宇は 2011 年 3・11 の福島事故直後に「未来を奪われた子どもたちのための葬送曲が聞こえるか」という論稿を発表（『基督教思想』2011 年 5 月号）し、地球温暖化の問題と結びつけて考察している。つまり核エネルギーは地球温暖化の解決のための代案エネルギーではなく、地球温暖化の重要要因の一つという。それを説明するためにクライブ・ハミルトン(Clive Hamilton)の研究成果¹などを取り上げている。NP0「エネルギー正義行動」の代表である李憲錫は、「核発電、私たちが忘れて過ごした不便な真実」で、一般環境運動団体の立場からキリスト者に原子力問題の真相を六つの矛盾と問題点として説明している。NP0「エネルギー代案センター」の事業にも協力している李必烈教授（韓国放送通信大学）は、「原子力の代案はあるか」という論稿で、太陽光及び太陽熱エネルギーの活用を強く主張した。この章では原子力に関する基本的理解と概観を提示している。

第2部 現場からの声

第2部では福島原発事故を直接経験した日本滞在の牧会者の証言と、原子力発電所建設が引き起こす社会的葛藤と被爆者の人権問題が扱われている。

日本聖公会の李民洙は、「わずか 170 秒で日本の原発の安全神話は完全に崩れ去った」という論稿で、2011 年 3 月 11 日以後の状況を現場での直接経験に基づいて詳しく報告し、再生環境エネルギーへの政策変化が不可避であるとの展望を語った。NP0「緑の連帯気候エネルギー」政策委員として活動している李侑珍は、「原子力が社会に及ぼす影響と確執解消のための課題」という論稿で、原発建設が引き起こす社会的な影響と葛藤をどのように解消しなければならないのかという問題を検討している。まず「ソウルに原発を建てることができますか」という章で、人口が密集した都市権力から農・漁村が疎外されて被害を被っている現実を指摘し、代表的な社会的葛藤要因として「送電塔建設」と「温排水（冷却水）排出」という二つの問題を提示した。特に「送電塔」の問題についてはメソジスト（監理教）神学大学の李正培教授が「原発と送電塔」という論稿でより深く分析している。彼は「「送電塔問題」は正義の問題であり、既に「日常」として迫っている」と述べている。

「平和をつくる女性会」の代表である金貞秀は、「被曝者と十字架」という論稿で、原発で生産された電気を好きだけ使用している私たちを「被爆者」に対する「加害者」として規定している。

私たちキリスト者たちが「被曝者の立場で核なき世を作るために努力して実践してきましたが、今までの現実には核加害者だった」という告白は、実は私たちが避けたい「不便な真実」であるのです。（132 頁。以下頁数のみを記載）

金貞秀は、発電所を建設する政府と企業だけではなく、その電気について無批判な使用者も加害者であるという事実を悟らなければならない、特に、福島地域の住民と労働者の絶望的な状況と自分の出身地を隠さなければならないというような 2 次的な被害が発生する現実を指摘する。さらに人間以外の動植物を含んだ自然界の被爆を言及しながら、春になっても木が花を咲かせることのできない「沈黙の春」を強要していると批判する。（134）しかし、韓国のような狭い国土における原発密集度を考えて見ると、発電所や事故現場周

辺の住民だけが被爆者ではなく、首都圏地域の住民全体が被爆加害者でありながら同時に潜在的な被爆者であることを覚えなければならないと語る。自分たちもまったく同じ被害者でありながら、被爆者を「他者化」する私たちの姿を悔い改めて懺悔しなければならないと主張している。

私たちもいつかは、十字架を負うことにもなる、被曝者や犠牲者になるという認識の転換……被曝者たちの顔は私たちの顔なのであるということを、レヴィナス(Emmanuel Levinas)が語ったように「苦しむ顔を憶えて責任を負わなければ、それは取り返しのつかないこととしてブーメランになって、私たちがすぐ被曝者の顔になるはずだ」と認識すること。それが十字架のイエスの姿にもっとも正面から対峙することになるのではないのでしょうか。そうだとしたら、「核なき世」のための私たちの認識と実践、神学と倫理の転換は私たちも潜在的被曝者として、「猶予された放射能汚染の被害者」として、世のすべての被曝者や核発電所地域の住民と労働者たちを他者化する「距離を置くこと」をやめることから始めなければならないのではないかと思います。これがまさに、私たちの悔い改め(メタノイア)ではないかと思います。(137)

第3部 原発問題、その神学的応答

第3部では5人の神学者の声を通して神学の各分野における原子力の神学的理解と展望がどのように可能なのかについて考察がなされる。

梨花女子大学の張允載(組職神学)は、「核とキリスト教信仰は両立しえない」という論稿で「核は神なしにこの世を支配しようとする絶対権力に対する欲望であり、全宇宙に対する「神の主権」を拒否しようとする現代版の禁断の果実の出来事であり、また地球の生命体を絶滅させることのできる死の権勢である」(p. 147.)とした。彼は先の金貞秀と同じく、原子力問題は「被曝者の立場に立って」神学的に苦悩しなければならないテーマであることを再び強調しながら、「核兵器と核発電は一卵性双生児である。したがって、核兵器だけでなく、核発電も平和と両立しえない」(150-151)と断言した。続いて彼は高木仁三郎の見解を紹介し、原子力は「天の火を盗み、地球上でこの火を起こしたことが人間の傲慢である」(159-160)という彼の批判に同調している。結局、原子力は「現代版の善悪を知る木」であり「物質主義の象徴」として「環境の問題というよりは、神になろうとした人間の問題」と評されねばならない。それと同時に旧約聖書のヨブを私たちの自画像として紹介し、核産業を「レビアタン」に比喻する。一方、罪とは「自ら神となろうとすること」(162)と指摘したカール・バルト(Karl Barth)の理解と「有限性を無視して飛び越えることであり、その可能性と限界を否認することであり、被造物であるという事実を拒むこと」(162)としたラリー・ラスムッセン(Larry L. Rasmussen)の言葉通り、核そのものが「罪悪」という事実を論証した。またWCCの第六回バンクーバー総会で決議された内容のように「核は、創造主である神に背くものであり、生命の神を否認するもの」(163)、さらに核は「イエス・キリストの道と真理を拒否するもの」(163)だとみなした。結局、核は「社会・国家・地球全体の真の安全保障を脅かす人間の愚かな自滅の道」であり、「このような時にほど、宗教的な良心の役割が重要である」(164)と強調している。

また李正培は、福島事故が発生した直後に「核エネルギーに対する神学的省察：福島原発の崩壊状況を見守りながら」という論稿を発表し、「キリスト教的な立場から見る時、原発はその存在すらも反神学的である」(168)とした。しかし、ガイア(Gaia)理論を創始

した J・ラブロックも原発には極めて寛大であったように、原発が「必要悪」(170)として認識される現実と、その原子力によって「ガイア(自然)の復讐」(171)がより一層加速化される現状を指摘している。李正培は「原発の問題は結局、西欧の諸大国による「核放棄」にまでつながってこそ解決されうる事柄」(172)であることを強調しながら、ある神学者は「核大国が所有するその「核」の中」から新植民地神学の実体を読み取っている」(173)と指摘する。続いて彼は創世記に関する哲学者カントの省察、すなわち『たんなる理性の限界内の宗教』に登場する「禁止の戒め」に注目し、原子力を善悪を知る木と結び付けて説明する。最初から最後まで一貫して核を「反神学的、反キリスト教的である」と指摘し、さらには「反三位一体的」と説明する。(175)李正培のこのような視点は、ゴードン・カウフマン(Gordon D. Kaufman)の見解を踏襲したものと思われる。

韓神大学神学部金愛英は、「命を選ぶことを目指すフェミニスト神学的言説」という論稿で、福島原発事故による生命滅絶の危機問題をフェミニスト神学の観点から論じている。特に申命記 30 章 15-20 節に基づいて「生命」を「個人の問題」ではなく「共同体の問題」とみなし、「環境運動とエコ・フェミニスト神学は生命文化を志向する！」と強調する。(182)その例として 1986 年 4 月のチェルノブイリ(Chernobyl)原発事故に対するフェミニストたちの批判を紹介している。また韓国教会の女性グループが展開して来た脱核運動の成果と意味についても紹介し、そのようなエコロジー神学とフェミニスト神学の努力を高く評価した。

メソジスト神学大学で聖書神学(旧約)を教える李桓珍は、「核と聖書」という論稿で、聖書は原子力について直接言及していないが、「最先端新技術」という側面から聖書学的な考察が可能だと言う。それを説明するために創世記 11 章のバベルの塔の物語に登場する煙瓦とアスファルトの新技術を紹介する。(219-220)しかし、神と人間の問題は「新技術」自体にあるのではなく、また聖書も新技術を禁じてはいないと言う。聖書が語るのは新技術に関連した神と人間、人間と人間の間コミュニケーション(疎通)の問題であるとしている。すなわち核というものが、神が天に応答し、また天が地に応答して得られた結果なのか、が問われているのである。書評者として、原子力に対する聖書神学者たちの省察が十分でない状況において、このような試みは貴重であることを強調しておきたい。(221)

第 3 部の最後に、申益常は「核科学の未来のための神学的提言」で、福島原発事故以後、核科学が歩むべき未来を生命と平和という観点から考察した。彼は原子力を神学的に理解するためキリスト教の十字架と復活事件を柳永模などの韓国思想家が展開した東洋的生命観に基づく生命の「不二的属性」(230)と関連させている。

第 4 部 脱核のために教会が歩む道

第 4 章には、韓国基督教環境運動連帯と YMCA などの市民団体(NPO)で働くキリスト教界の環境運動家たちの声が集められている。第 3 部で扱った神学的応答(理論)を信仰生活や教会現場においてどのように実践可能であるかについて、考察が行われている。

基督教環境運動連帯政策室長である柳美浩は、「うめき声を聞く瞬間、脱核の夢はかなう」という論稿で、「志があれば、核なき教会、核なき社会は可能である」(247)と新規原発や寿命が尽きた原発の再稼動を放棄する実践を求め(具体的な生活守則と教育プログラムなどを提示)、「今すぐ自分の「エネルギーに対する必要性」を点検し、「食欲の線」

を決めて調節していく訓練」が必要であるとする。彼女は、「小さなうめき声に耳を傾けなければならないこと」を強調する。

神学者ポール・ティリッヒ (Paul Tillich) は「愛情のこもった傾聴」 (Loving Listening) をすれば生命の痛みを聞くことができると語った。聞けばその瞬間地球の治療が始まると語った。(249-250)

韓国 YMCA 生命平和センター所長である鄭址錫は、「核兵器・核エネルギーのない世界へ向かう：教会とキリスト者の信仰実践」で、キリスト教信仰による「脱核」宣言によって個人的運動を集团的な教会運動へと発展させるという課題とその具体案を提示している。教会内の人々を説得するためには「祈りと討論と教育からこの運動を始めなければならない」(257)とする。特に、NCCK、YMCA など韓国の教会組織が発表した「脱核宣言」は信条的な意味を持つとし、何よりまずこの宣言を「教団教会の信仰宣言として受容する過程を進展させなければならない」(257)と強調する。キリスト教環境運動連帯事務総長である梁在成は、「原子力発電とキリスト教信仰：原発爆発以後、教会の代案を求めて」という論稿で、風力を中心にバイオマス、バイオガス、水力、太陽力など再生エネルギーを通して電力を生産する「非原発国家・デンマーク」を韓国と日本のモデルとして提示している。

第5部 世界教会の責任と課題

最後の第5章には、個人と各個教会の次元を超えて地域あるいは世界的な次元で原子力の問題を扱うための提言が集められた。

アジア太平洋生命学研究院の院長である金容福は、「核問題とエキュメニカル運動：WCCを中心に」という論稿で、世界教会協議会(WCC)が1948年創立の当時から核問題と深い関わりがあることを指摘する。すなわち、第2次世界大戦直後の状況で日本の原爆被害を論ずる段階において「核兵器による広範囲で無差別的な破壊を罪と定め、神に敵対する罪悪である」(275)と規定した。そして「広島と長崎から出発し、スリーマイル、チェルノブイリ、福島につながる連鎖的災害、核生産、配置、管理、保有、小さな核兵器事故や放射性廃棄物とその再処理や保管問題は、総体的に理解されなければならない」(283)と主張する。特に第3節「核問題に対するエキュメニカル論議の展望」では、最近WCCが国際エキュメニカル平和大会(International Ecumenical Peace Conference)を開催し、その過程で「核のない世界」(World Without Nuclear Power)についてのワークショップ(Reasoning Workshop)と福島の核災害についての聴聞会を開催した事実注目する。その後、2011年11月にエディンバラでWCCがENNN(Ecumenical No Nuke Network)を立ちあげたが、彼は「このようなエキュメニカルな連帯は、「核のない世界のヴィジョン」に共感し、戦略的・戦術的な行動の連帯網を構築して情報と経験を共有するだけでなく、信仰告白的な立場を樹立することになるであろう」(286)としている。最後に「二〇一三年、WCCの釜山での第一〇回総会では、核問題に対して重要な決議をする見通しである。特にこの問題は、東北アジアの脈絡で具体的にアプローチしなければならないものであり、この問題の切迫性もまた浮き彫りにされなければならない」(287)と期待している。

続いて、韓国キリスト教社会問題研究院研究室長である金熙獻は、金容福の論議をより深め、世界教会協議会(WCC)に設置された「世界宣教と福音宣教委員会」(CWME)の文書が

原子力問題をどのように理解しているのかを考察した。（「WCC 及び世界神学界の省察」）特に CWME 文書の第 33 条を紹介し、原子力は「富と繁栄を通して、世界を救うことができるという偽りの約束」（299）であると強調した。

延世大名誉教授である盧晶宣（基督教倫理学）は、「核兵器と平和倫理：北朝鮮のミサイル発射と核首脳会議の虚構と真実」という論稿で、「平和的使用を標榜する原子力」の問題ではなく「核兵器」の問題を最近の状況を考慮しつつ考察を行っている。特に彼は冒頭で「今日、最も危険な核テロを全世界と自国民に対して行う国家は、福島原発事故を偽装、隠蔽している日本である」（301）と評価し、原発と核兵器の表裏一体の関係を強調した。また最近（2012 年 3 月 26 日）ソウルで開催された「核安保首脳会談」でもアメリカ、日本、韓国などが中心になった「表面上の会議」（de jure）にすぎないと評した。すなわち、その会議は「実際には北朝鮮の核とミサイル発射を封じ込めようとする会議であった（de facto）」（304）としている。諸先進国の核問題に対する偽善的で二重人格的な姿勢を批判し、彼は「核問題の根本は人間の無限の食欲を成就しようとする強大国と金融マフィアの隠蔽、偽装、虚偽の報告である」（305）とする。

最後の「東アジア非核化のための宗教間生命連帯」で、金容福は最近続いている済州島の海軍基地建設問題が「反平和的、反生命的である」と批判しながら論を始めている。この事件はただ韓国だけの問題ではなく、アメリカ、日本、中国、ロシアという四大核強大国が対峙した結果発生したものであり、金容福は済州島の海軍基地建設問題も済州島「カンジョン村の生命共同体は東北アジア全地域の生態系、すなわち東北アジア生命秩序の包括的な次元と関連して理解しなければならない」（312）と強調する。

付録 声明書の内容検討

最後に本書に付された付録には、福島原発事故以後に発表された韓国キリスト教界の脱核宣言文が紹介され、現在における韓国キリスト教の原子力認識と公式的な立場を確認することが出来る。

2011 年 8 月に発刊された雑誌『韓国女性神学』（夏号）には、福島原発事故直後の 2011 年 4 月に「韓国女性神学者協議会」から発表された「2011 年命を選ぶことをめざす韓国女性神学者の脱核要求声明書」が収録されている。この声明書はその後発表された KNC の「脱核声明書」（2011 年 11 月 11 日）や「核のない世界のための韓国キリスト者信仰宣言」（2012 年 3 月 1 日）などと比較すると、福島原発事故に対する迅速な神学的応答であったという点で大きな意味を持つ。特に急を要する地球環境と生命の問題に対する宣言を女性たちが主導したという事実も注目に値する。本書に付録として収録された韓国キリスト教界の脱核関連の声明書は、2011 年以後、韓国キリスト者による良心宣言が凝縮されており、「信仰告白」であると言っても過言はないだろう。その中で、最近発表された「核のない世界のための韓国キリスト者信仰宣言」（2012 年 3 月 1 日）では宣言内容が 8 つの項目に整理され、²その最後の項目「キリスト者の行動綱領」には具体的な実践の可能性が挙げられている。これまで紹介してきた論考の各筆者の主張が総合的に反映された宣言文であり、2013 年の第 10 回 WCC 釜山総会が「世界で最も危険な核密集地域で開催される総会であることを全世界のキリスト者たちに喚起し」、「「核兵器と原子力」の問題が WCC 第一〇回総会の核心議題として採択されることを要求し」（343）ている。

3. 本書の意義

この書評の結びとして、書評者の立場から本書の意義について改めて論じてみたい。

アメリカのゴードン・カウフマン(Gordon D. Kaufman)は、1982年にアメリカ宗教学会の会長就任演説で、「核による地球の荒廃化に対処しなければならない私たちの責任」を想起させた。3年後の1985年、彼は『核時代の神学(Theology for a Nuclear Age)』³において「核は創造主である神を敵とし、反キリスト的であり、そのもので聖霊の歴史に対する」と宣言した。そして、このように人間が自分自身はもちろん、宇宙生命まで破壊し得る力を持った状況で神の概念を再構成しなければならないと強調した。以後約30年、私たちは相変らず「核武器」による滅絶の恐怖と「核発電」による被曝(radiate on poisoning)の脅威の下に生きている。2011年3月11日、福島原発の大災害は私たちに核の世界が決して安全な世界ではないことを悟らせた。「核を軍事的に使うことだけではなく平和的に使うことさえ世界的な脅威になってしまった」⁴と指摘したギュンター・アンデルス(Gunther Anders)の言葉や「原子力発電所は過去にただ一回も安全ではなかったし、今後とも絶対安全ではない」⁵というドイツのツァイト(Die Zeit)経済部編集長フリッツ・フオルホルツ(Fritz Vorholz)の言葉がまさに立証されたのだ。しかし「世界的に見ても原発といった科学技術に関わる神学的な議論はまだまだ不足しており、今後の課題として残されている」⁶。

その上、朝鮮半島と東北アジアが世界最大の核密集地域という事実は、韓国キリスト者の覚醒と新しい生の在り方を強く求めている。最近韓国のキリスト教界の牧師、神学者などによって「核なき世のための神学」(theology for a nuclear-free world)が新たに展開され、一冊の本としてまとめられた。もちろん親政府的で保守的な多数派キリスト教の牧師や神学者が、原子力問題に対しては今まで沈黙して来たため、韓国キリスト教界全ての原子力理解を代弁するとは言えないだろう。しかし、メソジスト教会(基督教大韓監理会)、基長(韓国基督教長老会)、イエ長(大韓イエス教長老会)統合側、大韓聖公会、NCKK、YMCA、基督教環境運動連帯(基環連)などを中心に牧師と神学者、キリスト者である科学者、市民運動家が預言者的な使命感を持ち原子力問題に本格的に関わり始めている。

韓国と日本は原子力問題において、生死を共にする「一つの運命共同体」であることを告白せざるを得ない。だからこそ、ここに自らの民族や国家の利益などに固執する余裕はない。韓国と日本が手を取り合って連帯し、共に生きていく方法を模索しなければならない理由がここにある。⁷そのような理由と動機を知るために今回発刊された『原子力と私たちの未来:韓国キリスト教の視点から』が、原子力問題に苦悩する日本のキリスト教界にわずかでも役に立つと確信している。反対に、日本で発刊された『原子力とキリスト教』(新教出版社、2011)などの本は韓国キリスト教に大きな刺激となるだろう。この二つが同じ方向に向かって進んで行く時、どこかで接点が生まれるはずであり、そこで創造の瞬間の光を再び見つけ回復することができるのではないかと期待している。

¹ 特に2010年に出版された『ある種のための葬送曲: 私たちが気候変化に関する真実を拒否する理由』(Requiem for a Species: Why We Resist the Truth About Climate

Change)を参照。

² (1)被爆者の立場に立って (2)核は平和と両立できない (3)原子力発電は地球温暖化克服のための代案ではない (4)放射性廃棄物による地球汚染と生命破壊は創造の秩序の破壊であり神聖への冒瀆罪である (5)エネルギーへの貪欲と消費主義に基づく核文明から脱しなければならない (6)韓国政府は原子力発電中心の偽グリーン政策を放棄しなければならない (7)世界最大の核密集地域である東北アジアにおいて生命の連帯が急務である (8)核とキリスト教信仰は両立することができない。

³ Gordon D. Kaufman, *Theology for a nuclear age*, Manchester, UK : Manchester University Press ; Philadelphia, Pa. : Westminster Press, 1985.

⁴ Volker Hage 「広島はどこにでもある」、『Economy Insight』12 (2011, 04) p.48. ; 『原子力とわたしたちの未来』、p.34.

⁵ Fritz Vorholz、「原発と別れなさい」、『Economy Insight』12 (2011, 04)) p.43. ; 『原子力とわたしたちの未来』、p.36.

⁶ 芦名定道、「書評：原子力と私たちの未来」、『福音と世界』、2013年3月号、p.5.

⁷ 『原子力とわたしたちの未来』、p.8.

(HONG Yi Pyo 京都大学大学院修士課程)